

わが故郷：釧路

旭川医科大学医師会
市立旭川病院

宮本 義博

私は釧路市で生まれ望洋幼稚園、桜が丘小学校→湖畔小学校、緑陵中学校、釧路湖陵高等学校と高校卒業まで釧路市で過ごしました。高校卒業後は帰省で帰るのみとなり、既に38年が過ぎています。

私が子供の頃は今のようないない時代ですから、よく外で遊んでいたのを覚えています。幼稚園か小学校低学年の頃だと思いますが、1歳年上の兄と近所の水たまりにヤゴ（トンボの幼虫）を取りに行ったこともありました。今は住宅街でヤゴを目にすることはできないかもしれません。小学校3年の時に引っ越しに伴い転校しましたが、友達と近くの山に行き蛇がいて驚いたこともありました。また沢にザリガニがいてはじめて目にしたときは手を挟まれるのではないかと怖かったことも覚えています。

中学生の時は坂を下り、そして急な坂を上ったところに学校がありました。毎日教科書や弁当（当時釧路市には給食センターがなく中学校は牛乳が出るだけで弁当持参でした）で重くなった鞆を肩にかけて坂を上っていたことが思い出されます。冬の凍結した時期は下校時に足を滑らせて転ぶと、運が悪ければかなりの距離をすべり落ちるような坂でした。卒業してしばらくした後に生徒数が多くなり、学区が変更となり中学校が新設されましたが、その後、少子化に伴い合併し名前が変更となり、緑陵中学校という名前はなくなってしまいました。緑中と呼んでいた日々が懐かしいです。

高校時代は生物部に所属し日曜日（当時は土曜日まで授業でした）に仲間と列車に乗り、研究と称して近郊の細岡や遠矢に遊びに行ったりしていました（当時はまだJRではなく国鉄で片道200円弱だったと記憶しています）。釧路湿原に谷地坊主を観察に行ったり、顧問の自動車で釣りに行ったこともありました。湖陵祭では行灯行列があり、行灯製作のため放課後にクラスメートと近くの公園に行灯を運んで製作したこともありました。のどかな時代だったと思います。釧路湖陵高校は場所を移転して建て替えが行われているので、僕が過ごした富士見校舎は現存しないので、寂しい気持ちもあります。

いろいろなことがありましたが、釧路で過ごした時間は楽しい思い出がいっぱいです。年を重ねたからそう思うのかもしれません。時間に追われる時代でなかったころが懐かしいです。

「連携」の重要性

札幌市医師会
むぎのこ発達クリニック

田村弥生子

臨床医として40年、さまざまな子どもたちと関わってきました。17年前からは、知的障害、発達障害など一人で生きることの難しい子どもたちとその親御さんと関わっています。その中で「連携」することの難しさと重要性を日々考えさせられています。

札幌では、乳幼児健診、保育園等支援事業などにより、生きにくさを感じている子どもたちが医療機関への紹介事例となります。また、保育園、幼稚園、学校などの集団活動開始後、適応の難しさが見いだされ受診する子どもたちが増えてきています。医療機関でのアセスメントの後、必要に応じ児童発達支援事業所（札幌市内約200ヵ所）を利用し、場合によっては居宅支援、移動支援、ショートステイ等を利用しています。

医療では、療育指導、投薬、心理療法、理学療法、作業療法、言語療法を行っています。学童期に入ると教育機関との連携も必要になります。

「連携」も成長に伴い、点と点から面として一人の子どもと関わることが重要になります。

障害を抱えている子どもたちは、自己肯定感が下がって他者への信頼も薄れて二次障害を呈することがあります。身体症状を訴えての不登校、うつ傾向、他害、暴言、さらに強迫症状、反抗挑発症、素行症にもつながりかねません。二次障害を呈さず健全に社会の一員として暮らせるように面での連携をしたいものです。

障害のある人たちに対して、医療モデルと社会モデルとの考え方があります。医療モデルは個人の心身機能に原因があるとの考えのため、個人の努力が重視されます。例えば、落ち着きのないうちは、頑張って授業に参加しなくてはならないという考え方です。一方、社会モデルは、障害のない人を前提に考えられた「社会の作り」「仕組み」「考え方（固定観念）」に原因があると考え、社会環境のあり方、仕組み、「こうあるべき」ということを修正することにより、快適な生活を送れるという考え方です。ここでも、医療と福祉などの連携を図らなければ、スムーズにいきません。

我々、医療でできることは、ひとりの人間が生活していくうえでは、ほんの一部なのだと思います。これからも、ひとりの人が、その人らしく社会で楽しく快適に暮らせるようにさまざまな機関と連携し、自分が医療者としてできることを微力ながら続けていきたいと思っています。

とはいえ、これからもゴルフ好きな夫と、知的障害のある息子と密な連携を心がけていきます。